

龍が如く5.5 ～葬の絆

けんいちろう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二度目の人生を孤児院で過ごした男が命を懸けて家族を取り戻す話。

目次

第一部	
第一章	
『決意』	
—	
	1

第一部 第一章 『決意』

俺が桐生一馬という、明らかにカタギに見えない男に拾われたのが今から六年前。

如何に前世の記憶があつたとしても、肉体が思春期の内に孤児として劣悪な環境を一年でも過ごせば精神的には相当参る訳で。どれだけその男が頭に『ヤ』の字がつきそうな人に見えても、差し出された右手は俺からすれば救いの手に他ならなかつた。

そしてそんな俺の杞憂とは裏腹に、桐生さんは沖繩で児童養護施設『アサガオ』を創設したただの養父さんだった。加えて彼の不器用な優しさは、恐らく十分な愛を享受し得なかつた孤児から慕われる理由としては十分であり、俺も桐生さんからやべえ過去を話してもらええる程度には仲良くなつた。

因みにそのやべえ過去なのだが、マジでやべえ。具体的には単身でメツチャ大きい暴力団相手に何度も一人で立ち向かい、その過程で虎を素手で倒したり、武装した戦闘員100人を真つ向から叩きのめしたり。もはや化物である。というかよくその話を俺にしてくれたなつて思った。

当初は流石に盛りすぎだろと思つていたが、その証人が遙ちゃん（桐生さんと最も付き合ひの長い孤児、めっちゃ可愛くていい子）であり、そこそこ過ごせば桐生さんも遥

ちゃんも滅多に嘘をつかない人柄という事はすぐに分かる。何より目の前で彼が喧嘩してるところ見れば、誰しもが彼の伝説に納得するだろう。複数人チンピラに絡まれてもモノともせず、逆に返り討ちにするオッサンとか怖すぎない？

さて、話を戻して。俺が『アサガオ』で過ごすこと約二年。突如『アサガオ』はその存続の窮地に立つことになる。というか建物ごとぶっ壊された。挙句の果てには遙ちゃんが頬を打たれたので、頭にきてそいつを殴り飛ばしたら滅茶苦茶ボコボコにされた。後から知ったが、その俺をコテンパンにしてくれた男は峯といい、どうも桐生さんが代表だった関東広域暴力団『東城会』の直系組織の頭だったという。

最終的には、いろいろあつて桐生さんが東京に乗り込み物理的に頑張ってくれたおかげで、『アサガオ』が完全に潰される事だけは避けられた。当の桐生さんは逆恨みでナイフで刺されて重傷を負ったらしいのだが、そこは流石の伝説の男。普通にびんびんして返ってきた。またこの事件で重傷を負った琉道一家も皆助かったし、この件は正に事なきを得たって感じである。

それからまた一年後。桐生さんはまた厄介事に巻き込まれたのか、東京に飛んで行った。でもすぐに帰って来たので特に問題なし。本人も「ケジメをつけただけだ」と言っていたし。

で、ここからが本題なのだが、『アサガオ』で生活してから約五年。俺が19歳にな

り、沖縄で漁師として働いてそろそろ慣れ始めた頃の話である。いよいよもって綺麗に育った遙ちゃんが大阪の芸能事務所的女性に半ば強引に見出され、アイドルとして活躍するようになる。そして元極道という異色の経歴を持つことに負い目を感じたのか、それともそれ以外の何らかの理由があつたのか桐生さんも『アサガオ』から姿を消した。

年長者という事もあつて二人に『アサガオ』を任された俺は、琉道一家の人たちの力を借りながら漁師の仕事の傍ら『アサガオ』の運営をするようになる。前世では一介のサラリーマンだった俺だが、この時ほど仕事にやりがいを感じた事はなかった。無論、桐生さんと遙ちゃんに会えない事は悲しかったが。

パソコンに向かってキーボードをひたすら打ち込む作業、もしくは多くの人々に向かってプレゼンの入念な準備をする事。そうしたデスクワークよりも、単純に体を動かす事が好きだった俺にとって漁師という仕事は存外相性が良かったのかもしれない。ましてや、同じ孤児の皆の成長を見守る事に一種の喜びを見出したのだから猶更だ。

しかしそんな穏やかな時間とはあるニュースによつて終焉を迎える。

2012年12月、澤村遙の衝撃的カミングアウトと電撃引退。そして2013年6月、元『東城会』四代目会長桐生一馬の器物破損傷害罪で逮捕。

まず遙ちゃんに聞してなのだが。彼女は東京で公演された大規模なステージで桐生

さん、つまり元極道に育てられた事を告白した。そしてそのまま軌道に乗り始めたアイドルグループの引退を宣言する。本人からすれば、桐生さんや『アサガオ』の皆とまた仲良く暮らしたかったが故の決断だったのだろう。しかし流石にタイミミングと内容が良くなさ過ぎた。案の定、世間は澤村遙という個人を大バッシングし、ネットでは誹謗中傷の限りが尽くされるようになる。

また同時期に勃発した関西の指定暴力団『近江連合』と関東の『東城会』による抗争。その責任として九州にいた筈の桐生さんが逮捕され、本人も特に弁明する事なく約三年の懲役刑に服することになる。俺からすれば本当に謎なのだが、本人は「ケジメをつけたいから」と言っていた。残された子供たちはどうするんだって聞いても、彼の意味が変わる事はなかった。

そして桐生さんが『アサガオ』に居ないうちに問題は更に加速する。

「あーマジか」

SNSで「澤村遙、発見！」というつぶやきを添付された『アサガオ』の写真と共についに見つけてしまった。遙ちゃんの引退宣言から約1年、寧ろよくもったほうだとは思うが。

「どうするかね」

ぶっちゃけた話、この未来は見えていた。しかし今日までその対応策は見つからな

かった。『アサガオ』に帰ってきた遙ちゃんには極力外に出ないように言いつけていたし、大変申し訳なかったが琉道一家の方々にもあまり『アサガオ』には顔を出さないように伝えていた。しかしそれが俺の精一杯である。

「……で、案の定。もういない訳だ」

早朝。『アサガオ』に戻ったら遙ちゃんは既に姿を消していた。そして遙ちゃんの次に年長者である綾子ちゃんは昨夜、遙ちゃんと話をする機会があつたらしい。その彼女が言うには――

「遥お姉ちゃん、少しの間おじさん（桐生さんのこと）のそばで暮らすんだって。だから暫くの間は帰ってこないって……」

ということらしい。絶対嘘だと分かるが、これも彼女なりの優しさの表れという事か。なんというか、直感だがもつと良くない方向に話が進みそうな気がする。

恐らく遙ちゃん本人は『アサガオ』の皆に迷惑をかけたくなかつたのだろう。最近では三雄の野球推薦の話もあつたし、スキヤンダルの負い目は凄かつたに違いない。だが選ぶ選択がどれもこれも極端なのが頂けないし、気に食わない。仮にも俺達を家族だと声を高らかに言いたいのなら、せめて報告くらいしてほしかった。

「おっけ。よくわかつた」

彼女がそういう義理に反したことをするのならば、俺にも考えがある。

「ど、どうしたの？ 譲治お兄ちゃん……」

理緒奈ちゃんが心配そうに俺の袖をつかんだ。俺は彼女の頭を優しく撫でながら息をつく。

「皆、遥ちゃんと一緒に暮らしたいよな」

俺の問いかけに『アサガオ』の皆は一様に頷いた。

★

「譲治、その話は本当か？」

強化ガラス越しに、相も変わらずごごっつい顔つきの桐生さんがそのように告げた。顔の皺がおつかねえのなんのって。

「嘘をつく理由がないし、その様子だと遥ちゃんからの連絡もないみたいだね」

「……ああ」

酷く焦燥した様子 of 桐生さん。彼女、アンタに似て一人で抱えすぎる癖ができてんよお。それは人によってはカッコよく映るのかもしれないが、場合によってはただ人を心配させるだけに終わる事を自覚した方がいい。マジで。

「アンタにも遥ちゃんにも困ったもんだ。どうしてこうハウレンソウが抜けるかね」

「……お前には迷惑をかけるな」

「まったくだよ」

笑いながら言う。すると桐生さんは更に苦々しい表情になつては、視線を落とした。まあ実際、いきなり二人とも消えたかと思えば、二人とも全く同じタイミングで問題を起して、拳句の果てには失踪と逮捕のダブルパンチ。もう胃がキリキリして仕方がない。

「それで、だ。桐生さん、俺はこれから遙ちゃんを探そうと思う」

「なんだと?」

「これは『アサガオ』の皆の総意だ。みーんなアンタと遙ちゃんの帰りを待つてる」心配そうな顔をしても無駄である。アンタはアンタが今まで行ってきた事の意味を思い知るといい。どれだけ皆が不安に思ったのか、指を啜えながら味わうといいさ。そして刑務所から出た後は黙って幸せを享受しろってんだ。

「……お前の考えは分かった。だがアテはあるのか?」

俺の意思を感じ取ったのだろうか。意外にも引き留める事はしなかった。まあそれでもしんどそうではあるが。ざまあ。

「いいや何も。寧ろ桐生さんこそ何か知らない? 例えは何でもかんでも知ってる情報屋とか。二元極道ならそういう人ともパイプありそうなものだけだ」

「——ああ、そういう奴なら心当たりがある」

「マジか。いいね。教えてよ」

適当に思いついた事を言っただけなのだが、まさか本当に心当たりがいるとは。この人と会話するといつも思うのだが、どんな人生を歩めばそういうアニメや漫画の登場人物みたいな人達と知り合いになれるのだろうか。いやまあ、この人の存在そのものが任侠モノの主人公っぽい気がしなくもないが。

「すまない。それは出来ない」

「なんで？」

「ここでは話せないからだ」

「あーなるほど」

それもそうか。確かにヤクザさんと関わりのある情報屋、もしくはそれに携わる職種の人ならばまず間違いなく後ろめたい事情のある人だろう。ましてここは刑務所なのだから、おいそれと口にするわけにはいかないのも納得である。

「だがそうだな。神室町には花屋がある筈だ」

「なるほど？」

「俺に言えるのはそれだけだ」

十分である。少なくとも何も知らない状態よりはよっぽどマシだ。

「ところで譲治。『アサガオ』はどうした？」

「琉道一家を始めとした現地の人たちに頭下げたよ。俺の代わりに面倒見てくれて」

「……そうか。本当に面倒をかけたな」

言葉では謝りながらも、心底安心したように独り言ちる桐生さん。その優しい顔は確かに遙ちゃんを通じるものがあり、だからこそ『アサガオ』の皆はこの二人を慕うのだ。

そして人間誰しも過ちを犯すものだ。それがどんなに優しく強い人でもだ。寧ろだからこそ選択を間違えるかもしれない。しかしそれを補って助け合うのが正しい『家族』のあり様というものだろう。少なくとも俺はそう思う。

「遙ちゃんの件は俺に任せてくれ。絶対『アサガオ』に連れ帰る」